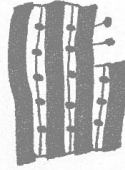


大学教育と地域学習

愛知県南知多町内海の歴史調査を通して



曲田 浩和

日本福祉大学・経済学部

はじめに

二〇〇五年九月、日本福祉大学は文部科学省の現代GP「知多広域圏活性化に向けた学生の地域参加」に採択されました。そこで、私の専門である歴史を素材とした「海の文化とものづくりプロジェクト」を立ち上げました。本稿は、このプロジェクトを通じて学生が学んだ実践記録を紹介したものです。

活動の学生は、経済学部の学生でありながら、日頃ゼミ

で歴史を学んでいる学生たちが中心です。歴史学専攻の学生ではないので、歴史を学ぶというより、過去の出来事の変化をどのように捉えるかに主眼を置いた内容です。また、ゼミでは歴史的現象が現代にどのように続いているかなどを考える取り組みを行っています。

まずは知ることからはじめよう

学生とともにどのような歴史学習ができるかを考える際に、対象地域の歴史を知ることがもつとも大切なことです。

そこで南知多町教育委員会の松本亀男さんにご紹介いただき、南知多町観光ボランティアガイドの方の案内で、二〇〇五年十一月、内海（「うつみ」と読みます）編集部を学生とともに歩くことにしました。目的は「内海の昔探し」です。

内海といえば、名古屋界隈で生まれ育った人には、思い出深い海水浴の場所として有名な地域です。最盛時一夏に百万人もの人が海水浴に訪れ、大いに賑わっています。

その辺りのことは学生もよく知っています。当日は、三年間アパートで暮らしている学生もいました。自分のよく知っている場所をどうしてわざわざ二時間もかけて歩かなければならないのか、という声も聞かれ、あまり乗り気でない学生もいました。

大学二年生十二名、三年生三名、総勢十五名が参加しま

まがりだ・ひろかず●一九六五年、三重県生まれ●主な著書・論文に「教員養成と定点観測調査」「日本福祉大学教職センター年報」第二号、二〇〇四年。「教員養成とインターンシップ」「日本福祉大学教職センター年報」創刊号、二〇〇三年。「伊勢湾周辺地域における木綿流通と知多木綿」「知多半島の歴史と現在」No.13、二〇〇五年●地域にとつての大学の役割を考える際に、地域を育てるなかで、学生を育てるという発想が必要ではないかと思っています。

した。四人のグループを三組、三人のグループを一組つくり、それぞれにガイドの方についていただき、細かな部分まで、説明できるよう配慮していただきました。

コースは次の通りです。

①先茆遺跡・林の峰貝塚↓②梅原猛郎↓③榎本養鶏場↓
④郷土資料館↓⑤千鳥ヶ浜海岸↓⑥唐人お吉の像↓⑦内海川周辺↓⑧廻船船主内田邸周辺↓⑨慈光寺↓⑩泉蔵寺↓⑪内海駅

「内海の昔探し」の学生の感想

ほとんどの学生が「驚き」を感じたようでした。

内海には一回も行ったことがなく、内海と聞いて思い浮かぶのも海ぐらいでした。正直何もないだろうと期待していませんでした。しかしいろいろな歴史にかかわるものがたくさんあり驚きました。

（二年生男子A）

十一月二十七日、ゼミで内海の郷土史を勉強した内海へ集まりました。最初、本当は内海に行くことにす

ごい抵抗がありました。すごく寒かったし、正直、内海は海水浴場とリゾートホテルしかないじゃないか、とずっと思っていたからです。でも今回、内海の観光案内のボランティアの方々に内海を案内していただき、内海の郷土のことを全然知らず、知ろうとしなかった自分が本当に恥ずかしかったです。

(二年生男子B)

内海の街を歩いてみて一言でいうと、正直びっくりしました。内海には夏に何回も行っていたし、大学の友達も内海に住んでいるので、結構知っていると思っていました。表面的な内海は知っていたけど、本当の内海は全くと言っていい程知りませんでした。

(二年生男子C)

学生が驚くのも無理はなく、学生たちは現在の内海しかみていません。おそらく自分たち学生だけで歩いたとしても、昔探しはできなかったことと思います。ガイドの方々の丁寧な解説により、歴史を発見することができました。

今回私が調査をして感じたことは、内海には多くの

歴史があるということです。多くの歴史があつて多くの名所があります。多くの歴史があるけれどどれもあまり知られていない気がします。私も今回のような調査に参加しなければわからないことばかりでした。内海といえば「海」という若者のイメージが定着気味ですが、もつと歴史に触れてもらうためにいろんなことを公開していけばもつと活性化していくと思います。

(三年生女子D)

Dは、これまで三年間内海のアパートに住んでおり、この地で生活してきたきた学生です。その学生でさえ、これまで内海の歴史的魅力を全く知ることがなかったのです。この学生は、私のように三年間この地に住んでいても、歴史的魅力を知らないのは、町がアピールしていないからだ、という思いを持つようになり、四年生になり、「内海の歴史的资源を活かした町づくり」をテーマとした卒業論文を二〇〇五年十二月に仕上げました。内容は内海の歴史的魅力をアピールできる素材を発掘し、それぞれに説明板の設置を提案し、簡潔にまとめた説明文を付けました。

自分の知らなかったことを、地域のせいにし、地域の歴史的资源をアピールするところは、怖いもの知らずの大学

生の強みかもしれません。この学生は「内海の昔探し」の後も、町の観光案内所などに通い、聞き取り調査を行いました。

内海の歴史的魅力とは

内海は、縄文時代に海進が起こったことを示す先苅遺跡や、源義朝が暗殺された野間が内海荘に属することなど、古代・中世の日本史を考える上で重要な地です。また、近年、江戸時代の菱垣廻船・樽廻船に加えて、太平洋側の海運を支える廻船集団・内海船の本拠として、注目されている地域です。高校日本史の教科書にも登場しています。近代以降、廻船で蓄えた経済力を元に、観光に力を入れ、現代に至っています。

さらに、幕末の日米通商修好条約の締結を行ったハリスの給仕をしていた斎藤さち(唐人お吉)の生家跡や世界で最初に一年間で毎日一個づつ三百六十五個の卵を生み続ける鶏を品種改良した榎本養鶏場の話なども学生の興味を惹いた内容だったようです。

高校までの日本史授業では、内海船はともかく源義朝やハリスは必ず登場する歴史上の有名人です。自分の知って

いる歴史と地域の歴史を重ね合わせることの楽しさを学生は感じたのでしょうか。また、このような話を大学の講義で聴いていても、印象としては日頃みている半島先の田舎の海の風景が勝ってしまいます。実際に歩き説明を聞くと、新鮮な内海の事柄として、学生が受け入れたのでしょうか。

地域の歴史学習は、小学生の郷土資料館の見学ぐらいいはなく、中学校・高等学校の歴史学習でほとんど取り入れられていません。歴史の舞台は、奈良・京都・鎌倉・長崎・広島などであり、自分の身近な地域とは異なるという感覚があるものと思われまます。

自分の身近な地域から歴史を発見することが、どれほど大切なことかについて、学生が感じた得たことは、地域学習の大きな一歩となりました。

記録を残すこと

二年生が三年生となり、内海の歴史に対する興味を持ったところで、記録を残す作業を行うこととしました。それは内海に残る石造物の調査です。今回は、入見神社・熊野神社・山神社・高宮神社の四神社を対象とし、百五件の調査を行いました。本調査の時期は二〇〇五年十月とし、三

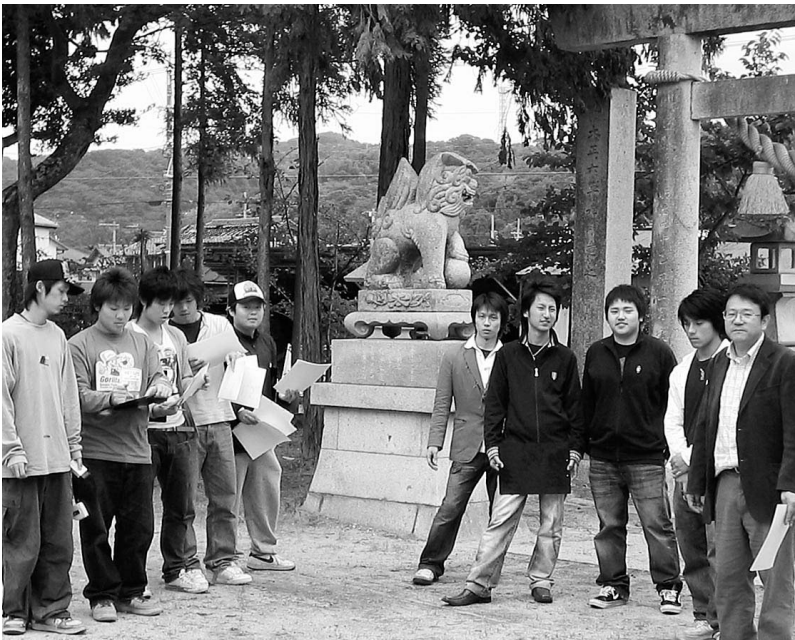
年生二十三名が参加しました。調査をはじめるとは、南知多町教育委員会の協力を仰ぎ、各神社および地区の方々に事前に調査許可を取っていただきました。

石造物は、鳥居・灯籠・幟台・石碑・標柱・水盤などの屋外の物です。年代のわかるもので、もともとも古いものは元文三（一七三三）年の鳥居であり、新しいものは平成十五（二〇〇三）年の灯籠でした。文化財という枠組みでは、対象とはならない新しいものもありますが、二〇〇五年現在の石造物という視点で調査を行いました。

調査内容は、調査対象物のスケッチ、写真撮影、部位ごとの計測と、刻銘の書き取りなどです。部位ごとというのは、灯籠でいえば、宝珠・笠・火袋・中台・竿石・基礎・基壇などに分かれています。それの一つずつの部位のタテ・ヨコ・高さを計測する。これらの情報を記録カードに記入するまでが現地での仕事です。

記録を残すことについて、学生に指導した点は一点だけです。それは第三者がみて、内容の理解できる記録カードを作成することです。このことを徹底するために研修を行いました。この点については後述することにします。

石造物調査は、一年二年先を考えた記録作業ではなく、数十年先を見越した作業であることを、学生に理解しても



らうことがなによりも必要なことです。また、災害によって、石造物が倒壊したとしても記録が残されていれば、役に立つことも多いことや、刻銘など風雨による摩滅で読めなくなる危険性についても話しました。このような点を強調することで、すこしでも精度の高い記録化を目指しました。

石造物調査を行った学生の感想

学生は石造物調査を行ったことにより、昨年、「内海の昔探し」で内海を歩いた以上に、内海の歴史について興味を持つことができるようになったと思います。

自分が描き、書き出したものが、たとえ歴史的に見て小さいものであっても確かな資料として、その石造物の存在を示しうるものになるとい感慨、それらが自分にとって、この作業の面白さにつながったのだと思います。

(三年生男子E)

私は、今回のような調査を地域の人などの多くのグループ・団体で度々行い記録に残し、万が一壊れてしまっても、その石造物が存在し、歴史的にどのような

意味があったのかなどを知ることができるようにすることが大切なのではないかと思いました。未来でも歴史に興味のある人たちが歴史を振り返ったとき、私たちが調査をした資料が役に立ってくれたら、とても嬉しいし素敵なことだと思います。

(三年生女子F)

古い灯笼は欠けていたり、文字を読むことができないものがほとんどでした。天災や長い年月で壊れていくのは仕方ないことだと思いますが、せめてもう少し保存してほしいものだと思います。(中略)内海という町は、歴史的な資源が多くある町だと思いますが、上手に活用できているとは思えません。もう少しきちんと資料を整理して、大きくアピールすることができれば良いと思います。せっかくの歴史的な資源があったくないと思いました。

(3年生男子G)

昔からの石造物があり、いままで大切にされてきたことがよく分かりました。しかし、あらゆる所に傷があり、これから先保存していくのが大変だと思いました。石造物調査をして、内海の貴重な財産になると思いました。このように調査を進めることで、一つずつ

歴史的資源を増やしていくことによって、内海の地域も詳しくなっていく、新しい歴史が生まれる可能性もあります。夏という視点ではなく、内海を見ることができるようになるのではないかと思います。

(三年生男子H)

学生にとって石造物調査はじめての経験でした。地域に残るさまざまなものに目を向けることによって、これまでとは異なった地域をみる目を養うことができたと思います。

石造物調査までの研修プログラム

先に述べたように、第三者がみてもわかる記録カードを作成することは、思った以上に難しい作業です。

学生は、自分で撮影した写真を記録カードに貼り付ける作業を二年生の頃から行っています。たとえば、正月の様子・町の風景などです。記録カードには、いつどこで、どのような状況のなかで写真を撮影したかを記入します。正月の様子では、雑煮の写真が貼られ、雑煮の特徴が記されているカードがありました。風景写真は、どの位置からど

のような角度で写真を撮影したかについて、地図に落とすことが重要です。撮影者と異なる人が、このカードをもとに同じアングルで撮影ができるかどうか重要です。いわゆる「定点観測調査」を継続的に行うことができる記録カードを目指します。このような作業を繰り返すことにより、次第にカードの精度は増していく、調査を行うだけでなく、調査した結果を大事にするようになっていきました。

つぎに、夏休みに自宅界隈の町や祭りの様子を調べる課題を出しました。自分の慣れ親しんだ町を自分の視点でみつめるためです。ただし、最初から「地域をみつめる眼差し」を持って、町を見にくるようになっていっても、うまくはいきません。夏休みに遊びにいくついでに、写真とその印象をレポートにするという課題です。

おもなレポートは次の通りです。

豊川・豊川稲荷	一宮・七夕まつり
名古屋・大須の商店街	四日市・鯨まつり
一色・堤灯まつり	南知多・鯛まつり
名古屋・ノリタケの森	岐阜・柳が瀬商店街
岐阜古川・町並み	富山・富山城
豊田・トヨタ博物館	清須・清須城
犬山・犬山の町	岐阜・岐阜城

さらに、夏休みの終盤、鳥羽・伊勢に一泊二日で研修旅行に出かけました。そこで写真撮影と記録カードの作成をもとにしたレポートを課しました。テーマは「印象に残った歴史的資源」としました。

どの課題も写真を撮影することを義務としています。被写体はその人の思いなど何らかの理由により選択されます。また、撮影した写真を記録化する際に、写真を見てもう一度考えることができます。本来は頭のなかで展開することかもしれませんが、写真を使用することにより、印象を鮮明にする効果があります。数十枚の写真から記録に残す写真を五枚ほど選び、文章を付け記録化します。

石造物調査を行う前に、記録を残す大切さと歴史的資源に対する理解を示しておくことが必要だと思えます。

学生が調査から学んだこと

大学は、高校時代までさまざまな地域に住んでいる人の集合体です。自宅から通う学生もいれば、遠隔地に実家があるため、アパートで一人暮らしをする学生もいます。学生が、内海とそれぞれ自分の生まれ育った町を比較することは大切なことです。

知多半島で生活を送った多くの学生は、この地を離れていきます。その後、家族とともに生活する場をどのような町にしたいのかが問われる機会が訪れると思います。この作業を通じて得た、地域をみる目が活かされるのではないのでしょうか。学生が、数年後、数十年後に良い地域住民となることを期待しています。

いま「村おこし」「町づくり」が各地域でさかんに叫ばれています。自分の生活する地域をどのような町にしたいのか、住民たちで話し合うタウンミーティングも行われています。生活の便利さを求めるとともに、地域に残る伝統や歴史性も話題となります。歴史的資源を活かした町づくりという視点は、持続可能な社会を実現していくなかで、重要です。

学生の石造物調査に対する感想のなかに、自分の育った地域との比較を行っている学生がいました。その地域に歴史があり、それがモノとして現在に残されていることは、特別なことではありません。ほとんどの地域で寺社があり、古い石造物は残されています。初詣で近所の神社に行くことや、こどもの頃境内で遊んだことは、誰もが一度は経験したことでしょう。ただし、そのなかにある石造物に興味を持ったものはほとんどいません。少し裏側を覗いてみる

と、いつ誰が奉納したものなのかがわかります。身近なものから歴史を発見する瞬間です。

学生のなかには、教員を目指す学生もいます。この調査が、総合学習などの地域学習に活かす経験につながることも願っています。歴史を発見することの面白さを伝える教員になってほしいものです。

石造物調査と町づくり

近年、学生が地域でイベントを企画したり、地域のイベントに参加するなど、地域の人々とさかんに交流しているケースが増えています。ほとんどの学生が学生生活を送る期間は四年間ですので、上級生が下級生に伝え、恒常的な活動にしていくことが必要です。

ただし、それだけでなく、学生が地域のなかで何かを残していくことも必要なことだと思えます。それが調査の記録化です。過去から現在にかけて残されてきたものを記録し、未来に伝えることができるとい思いが大切です。

石造物調査が地味な作業であっても、学生が有意義に感じることができたのは、その気持ちがあったからだと思えます。

今回の調査の経験を通して感じたことを、学生の声として、地域の人々に伝えたいと思っています。二〇〇五年四月に、学生と地域の人々との懇談会を開催しました。学生は「内海の昔探し」の経験を踏まえ、内海の印象を話し、住民の方々の感想も聞きました。二〇〇六年四月に、第二回目の懇談会を実施する予定でいます。今回は石造物調査を経験をもとに学生が話します。地域の人々も期待してくれていることと思います。

ただし、地域のなかで歴史的資源がどれだけ理解されているかは疑問です。それは内海に限ったことではありません。近年、歴史性を売り物にした町づくりは増えていますが、どのような歴史を辿り現在に至っているのかを地域の人々が理解している場所は少ないように思います。正確に歴史的資源の特性を理解したうえで、地域のなかで位置づけることが必要ではないでしょうか。とくに歴史的資源を活かした観光地では、訪れた人々に対し、その地域の持つ歴史性を示すことが求められます。

繰り返しになりますが歴史的資源の特性を知る作業は、地味で面倒な作業です。石造物調査はその一つです。このような歴史的資源を広く収集し、地域のなかで位置づける

ことが必要です。学生が行ったのはその基礎の部分だけです。それも今回調査を行ったのは膨大な歴史的資源のほんの一部に過ぎません。

学生が地域のなかでできること

石造物調査を一人で行うことは大変なことです。二十人を超える調査者がいるからこそできる作業です。ひとり四年間という限られた時間ですが、大勢が一同に集まることのできる学生という人材は、そう簡単に確保することのできない貴重なものです。その学生の力を、どのように地域のなかで活かすことができるのかを考えることは、とても大切なことです。その前提には、地域の人々にも、学生にとって有意義なものでなくてはなりません。

石造物調査によって記録された歴史的資源のデータが、地域の人々にとって、そのまま活かされることにはならないと思います。ただし、内海の歴史を知る一つの材料として、今後活用できる可能性を持つものであることを、地域の人々には理解していただければと思っています。「いま」だけでなく、「これから先」という気の長い話です。学生の感想にみるFの傍線部は、その気持ちを表しています。

本来は、学生と地域の人々が一緒に石造物調査ができることが望ましいと思っています。しかし、調査は地味で面倒な作業です。ある程度のコミュニケーションがとれないと、うまく作業は進みません。以前、内海ではありませんが、学生と地域の人々が共同で歴史的生活用品の調査を行ったことがあります。全くコミュニケーションが取れず、学生はつらい思いをしたと語ってくれました。調査をした結果は残りますが、学生の調査に対する理解が深まったとはとても思えません。

地味な作業を継続するには、作業の意味を理解してもらうことと同時に、コミュニケーションを取ることのできる環境が必要です。日頃から学生と地域の人々との間で、共同のイベントを開催したり、町内清掃などの恒常的な活動のうえに、石造物などの調査を位置づけていくことが必要だと思っています。これから活動の場を模索したいと思っています。この点は今後の課題です。

おわりに

学生の学習とともに、地域にとって役に立つ地域活動を行うことは、大変難しいことです。個人の教員の力だけで

はできるものではありません。

今回の活動は、冒頭で述べたように、文部科学省の現代G P「知多広域圏活性化に向けた学生の地域参加」が採択されたことにより、大学からの全面的な支援を得て行うことができました。また、正規の授業カリキュラムである「地域学」「フィールドワーク(国内・海外)」をベースに、このような取り組みが教員・学生ともに学部全体として理解されています。私の「海の文化とものづくりプロジェクト」を含め十三件の現代G Pのフィールドワーク活動が行われています。そのため、学生の地域活動がさかんになり、学生同士の情報交換から、自主的な地域活動も広まっています。

また、南知多町教育委員会との連携は、日本福祉大学知多半島総合研究所と南知多町の長年にわたる信頼関係によって成り立っています。また、学生のなかには同研究所の調査活動を通じて、歴史的資源の大切さを学び、記録カードの正確さを考える機会を得たものもいます。

このように学生が地域で学ぶ環境が整い、歴史学専攻でなくとも、歴史を学ぶ機会に恵まれたことが、今回の活動の基盤になっていると思います。

〔参考文献〕

拙稿「教員養成と定点観測調査」『日本福祉大学教職センター年報』第二号 二〇〇四年三月

『内海の昔探しに出かけませんか』へ日本福祉大学現代G P「知多広域圏活性化に向けた学生の地域参加」海の文化とものづくりプロジェクト報告集1～2005年三月。

日本福祉大学知多半島総合研究所『知多半島における持続可能な社会に向けた政策課題に関する研究』へN I R A研究報告書～二〇〇五年十一月。

